

保育内容総論

～生活・遊び・活動を通して
育ちあう保育を創る～

太田光洋
[編著]

朝木 徹・野中千都・相浦雅子・垂見直樹
前田有秀・東 義也・清水桂子
[著]

同文書院



編者まえがき

子どもたちはそれぞれの園の保育を通して学び、さまざまな力を自分のものにしていく。この学びを保証するものが「保育内容」である。保育者養成教育において、保育内容は5つの領域の観点から「乳幼児期の子どもに育てほしい力（ねらい）」と、そのために必要と考えられる「経験（内容）」が示されている。これら各領域のねらいや内容について学生や保育者が学び、それぞれが保育に生かしていくことが求められるが、その一方で、乳幼児期前半の生活は「生活と遊び」と捉えられるように未分化であり、いわば総合的でもある。したがって、保育者は乳幼児の生活全体のさまざまな場面で、各領域に示されるねらいや内容を意識して保育をすることが求められる。

たとえば、人の話を進んで聞く力を身につけてほしいと考えていても、皆と一緒に活動している場面で先生や友だちの話を聞くだけでは、こうした力は育たない。自由遊びの中でも、着替えや食事といった生活の場面でも、自分の思いを受けとめてもらう、話を聞いてもらう、保育者や友だちの言葉に耳を傾けることで自信がついたり、遊びが楽しくなったりするといった生活全体の経験を通して、その力を確かなものにしていく。

こうした観点から本書は、「保育内容総論」で学ぶべき基本的事項を網羅したうえで、次のような特徴を持つものとした。

一つは、乳幼児の生活を「遊び」「生活」「活動」とその相互性という観点から、総合的な保育のあり方を探ろうとしたことである。特に、幼児期の学習の中心である遊びを通して育つ力と、その後の小学校以降の学びとは、どのようにつながるのかをわかりやすく説明することを心がけた。

もう一つは、乳幼児理解と保育のあり方を結びつけ、乳幼児期の子どもにふさわしい具体的な遊びや活動、クラス運営によって子どもが育つ保育をどう創っていくかを理解し、広げていけるように、具体的な遊びや活動について演習を通して主体的に学び、理解を深められる内容としたことである。

本書が、保育についての学びに寄与し、子どもたちの充実した遊びや生活そのものである豊かな保育内容を創造する一助になることを願っている。

2019年3月

長野県立大学教授 太田光洋

執筆紹介

authors

【編著者】

太田光洋（おおた・みつひろ）／第1章，第9章，第12～14章
長野県立大学教授

【著者】

朝木 徹（あさき・とおる）／第2章
精華女子短期大学准教授

野中千都（のなか・ちづ）／第3章，第11章
中村学園大学准教授

相浦雅子（あいうら・まさこ）／第4章
別府大学短期大学部教授

垂見直樹（たるみ・なおき）／第5章
近畿大学九州短期大学准教授

前田有秀（まえだ・ともひで）／第6章，第10章
尚綱学院大学准教授

東 義也（ひがし・よしや）／第7章
尚綱学院大学教授

清水桂子（しみず・かつらこ）／第8章
北翔大学短期大学部准教授

第1章 保育の基本と保育内容の総合的理解 1

- 1 遊びと生活を軸とした保育内容の総合的理解 2
- 2 幼稚園、保育所、認定こども園における保育内容 4
- 3 保育の総合性と保育内容の理解 6
- 4 子どもとその生活の変容と保育内容 13

第2章 保育の基本と保育のあり方 15

- 1 乳幼児期にふさわしい生活 16
- 2 遊びを通しての総合的指導の意義と保育 20
- 3 一人ひとりの発達に応じた指導 22
- 4 保育者の役割 26

第3章 幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の保育内容 31

- 1 保育内容の変遷 32
- 2 幼稚園における保育内容 34
- 3 『保育所保育指針』の保育内容 37
- 4 幼保連携型認定こども園における保育内容 42

第4章 保育内容の基本構造 45

- 1 保育内容の基本構造 46
- 2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 52
- 3 「領域」とは何か 55

第5章 学びの連続性 57

- 1 就学前と小学校とのつながり 58
- 2 小学校との接続をめぐる日本の教育・保育政策上の動向 62
- 3 円滑な接続のための「連携」 65

第6章 子ども理解と保育 71

- 1 子ども理解とは（視点） 72
- 2 子どもの発達過程と保育 74
- 3 特別な配慮を必要とする子ども 78
- 4 子ども理解に基づく総合的な指導（子どもを大切に作る保育とは） 80

第7章 子どもにとって遊びとは何か 83

- 1 遊びの重要性 84
- 2 遊びの体験における意味の考察 87
- 3 遊びを生み出す環境と保育者の役割 90
- 4 まとめ 95

第8章 総合的指導としての保育 97

- 1 乳幼児の生活と総合的指導 98
- 2 園全体を通して子どもを育てる 99
- 3 生活をつくること 103
- 4 遊びと自己充実 104
- 5 子どもの育ちと総合的指導 108

第9章 保育の計画と記録 109

- 1 保育の計画はなぜ必要か 110
- 2 保育の計画 112
- 3 保育記録の意義と視点 118
- 4 保育の評価と改善 119

第10章 子どもの姿を読み取る（事例研究） 129

第11章 乳児期の子どもの遊び、活動と教材研究 137

- 1 乳児と生活 138
- 2 乳児期の保育内容 142
- 3 保育内容から考える乳児の遊び 143

第12章 幼児前期（1～3歳未満児）の子どもの遊び、活動と教材研究 149

- 1 幼児前期の発達の特徴 150
- 2 幼児前期の生活と遊び 151
- 3 遊びと環境をつくる 155
- 4 演習 158

第13章 幼児後期の子どもの遊びと生活 159

- 1 幼児後期の発達の特徴 160
- 2 幼児後期の生活と遊び 162
- 3 遊びを通して育つ力 167
- 4 遊びの環境づくり 168

第14章 模擬保育 173

- 1 活動の選択と遊びのアイデアづくり 174
- 2 活動の進め方 178
- 3 各学年の具体的活動例 178

索引 186

第1章

保育の基本と 保育内容の総合的理解

- 幼児にふさわしい保育内容とはどのようなものか、「遊び」と「生活」の観点から考える。
- 幼稚園、保育所、認定こども園に共通する保育内容と、保育によって育つ力について学ぶ。
- 保育の全体構造を把握した上で、保育に求められる環境と活動を考える。
- 保育が抱える現代的な課題を理解して、どのような配慮が必要かを理解する。



乳幼児期における生活は、おとなとの信頼関係を土台として、主に「基本的生活（食事や睡眠等）」と「遊び」とで成り立っており、乳幼児はこれらを通して成長、発達するといえる。「生活」は現実に適応するために必要な目的をもった活動であり、「遊び」は、それ自体が目的となる活動である。

たとえば食事のとき、スプーンでテーブルを叩く乳児の行動を「生活」か「遊び」のいずれかに分類することが難しいように、「生活」と「遊び」の境界は、年齢が低いほど曖昧である。しかし、乳児期の母親と乳児の交流自体が遊びとして展開すること、幼児前期の遊びが道具を使った機能的な遊びが多いことを考えると、遊びがもつ心理的特性こそ、乳幼児の主体的な活動の基盤になっていると考えられる。その意味で、乳幼児は遊びを通して学ぶということができ、楽しく、自分から進んで取り組もうとする遊びの特性が保育内容・方法として尊重されることが重要といえる。

2 幼稚園、保育所、認定こども園における保育内容

それでは、幼稚園や保育所、幼保連携型認定こども園等における保育内容はどのように位置づけられているのだろうか。

1 「幼児教育」として共通する保育内容

2017（平成29）年に、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育保育要領』が同時に改訂（改定）され、これらの保育・教育施設に通うすべての子どもに共通する質の高い幼児教育を保障しようとする事となった。3つの施設で共通する保育内容を「幼児教育」として位置づけることとなったのである。これによって、幼稚園、保育所、こども園の3歳以上児の保育の5領域に示される保育内容は共通するものとなった。保育内容5領域は、これまでも幼稚園と保育所でその内容の共通化が図られてきたが、これらの領域に示される幼児期に経験してほしい事柄が明確に整理されたこととあわせて、幼児期の前後にあたる乳児期から幼児前期（3歳未満児）、学童期（小学校期）との保育内容、教育内容や学びのつながりがより意識されるものになっている。

また、保育内容はその方法と密接な関係を持っているが、幼児期は主に遊びを通して身近な環境（人・もの・こと）への主体的な関わりを通して学び、成長していく。そのため、子どもは、保育者の仲立ちを通して様々な「人、もの、こと」に出会うが、さらに学びを深めるためには子ども自身の動機や関心の深まりに支えられることが求められる。その意味で、子どもの経験（保育内容）は、一律で一定の活動内容や方法だけでなく、それぞれの子どもの学びの態様に

じて、保育者がその環境や関わりを工夫していくことが求められる。

2 保育内容を通して育つ力

(1) 資質・能力の3つの柱

保育や教育は、特定の時期の子どもの成長や発達だけでなく、生涯にわたる一人の人間としての成長を目指している。そのため、乳幼児期にふさわしい環境による保育を通して、幼児期にどんな力が育つのか、そしてそれはその後の成長にどうつながっていくのかという見直しをもったものである必要がある。こうした観点から、示されているのが「資質・能力の3つの柱」である。

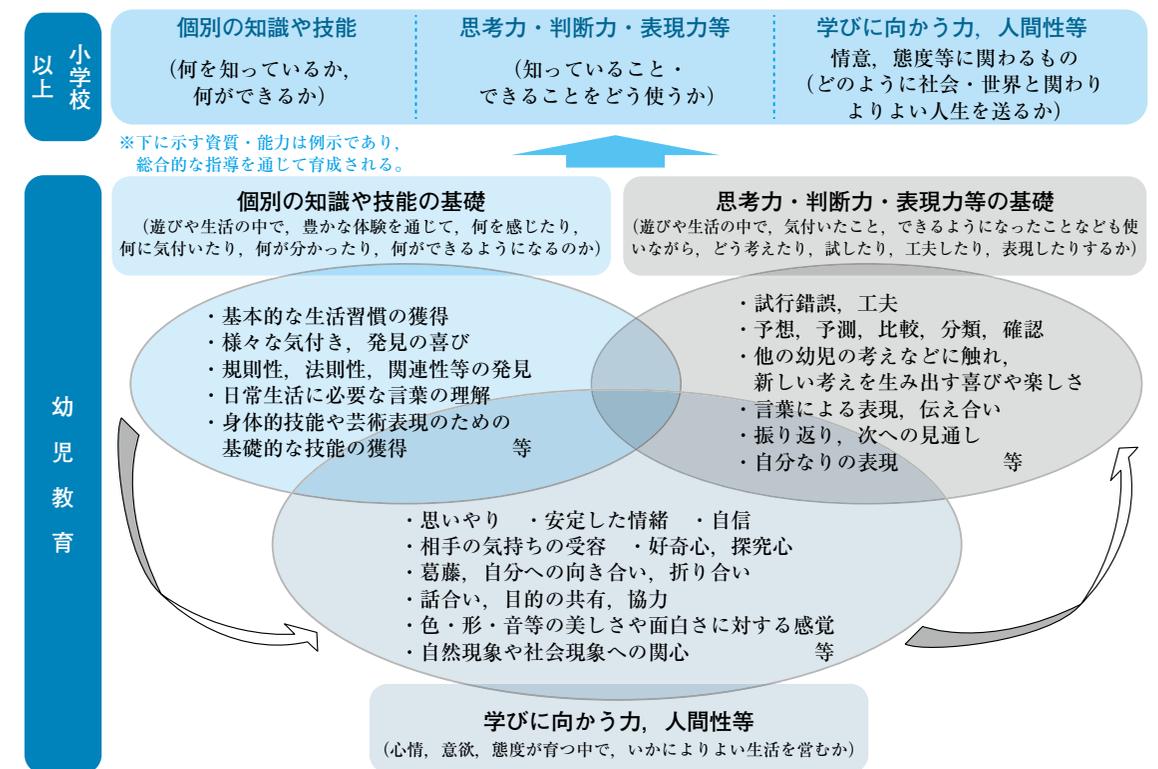


図1-2 資質・能力の3つの柱*

*文部科学省「資質・能力の3つの柱に沿った、幼児教育において育成すべき資質・能力の整理イメージ(たたき台)」2016

これらは、遊びを中心とする総合的指導を通して、育まれる生きる力の基礎となる「個別の知識や技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」などであり、学童期以降の知的、情意的・社会的な面の発達の基礎となるものである。

幼児期に育みたい「資質・能力」は、保育内容の5領域の内容に基づく活動全

密接に関係する。言葉を介して、子どもたちと保育者が共に考え、そこでのやりとりが子どもの「内なる他者」を育て、思考を深め、価値を共有し、育ち合いの基盤と個々の子どもの内面をかたちづくる重要な機能をもっているからである（図1-5）。

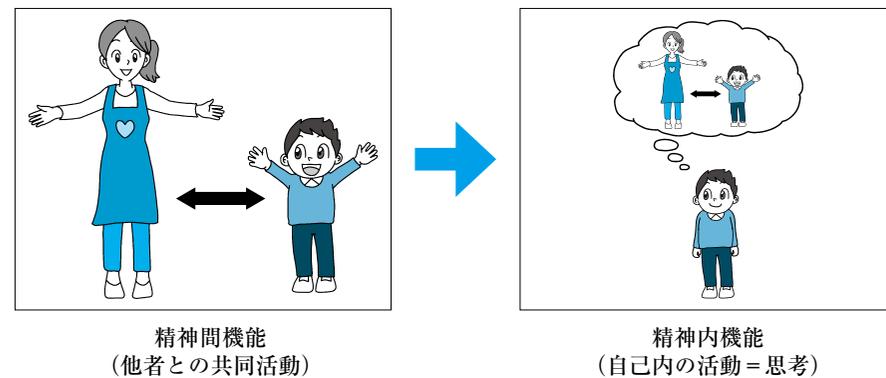


図1-5 精神間機能から精神内機能へ

こうした手段として絵本や紙芝居など生活に浸透している文化的な体験も含むものと考えたい。これらの共通経験は「活動」として行われることももちろんあるが、人としてのあり方や日本人としてのアイデンティティをつくる文化的要素は日々の生活の文脈に埋め込まれていると考えられ、共通経験が価値の共有に役立つと同時にクラス意識を育てて行くと考えられるからである（図1-6）。

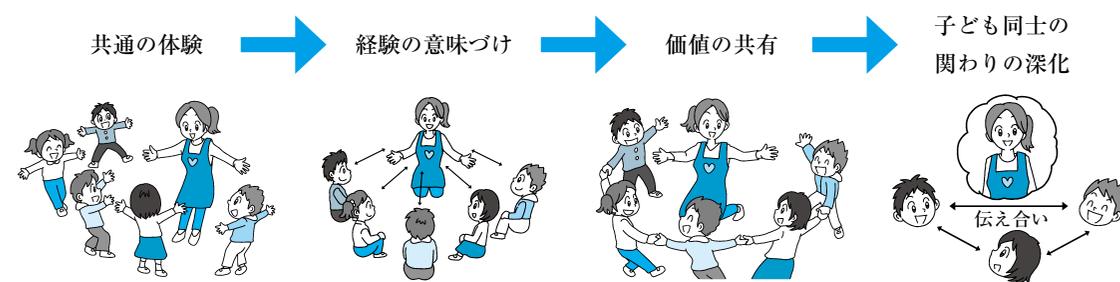


図1-6 価値の共有がクラス意識を育てる

また、「仕事」は、明確な目的を持ち、自分だけでなく「みんなのため」に行われる活動で、有用さと確実さが求められる一定の責任を負うものである。そのため、その日の気分によって「しない」というわけにはいかない。

ネチャーエワ（1971）は仕事の過程の本質として、①目標を立てること、②そ

れを達成するための方法を見つけること、③目標に応じた成果をあげることを指摘し、この3つの要素が子どもの活動に認められれば仕事をする力が形成されつつあると述べている。言い換えれば、目標もなく（なんとなく）、いわれたままに行うのは仕事をしているとはいえないということである。

仕事には、注意力、根気強さ、小さな障害の克服、仕事の結果を思い描く、方法や手段を考える、仲間と意思疎通を図る、仕事の結果を評価する、意識的に仕事に集中するなどの力が求められる。しかしなんでもできるわけではない。幼児期の仕事の計画や過程の管理はあくまでも保育者にあるので、それぞれの時期や子どもにふさわしい仕事を、おとなとの共同活動として取り組んでいくことが大切である。清水（1978）は、子どもに与えられる仕事の条件として次の5点を挙げている。

- ① 作業内容が子どもの能力に見合うものであること
- ② 魅力的な仕事であり、やることに誇りが持てるものであること
- ③ 自分だけでなく仲間の共同生活に役立っているという見通しや関係を理解できること
- ④ 仕事の中で新しい発見があり、好奇心を刺激され、工夫の余地があること
- ⑤ 仲間との協力関係が保証され、困難や成功を共に経験できること

こうした点に配慮しながら、保育者の支えのもとで展開できるようにしていくことが求められる。

6 自由な遊び

幼児にとって遊びは、主体的に取り組む学習そのものである。したがって、子どもの自由な遊びは、子どもたちがそれぞれの興味・関心に応じて選択して取り組めるように、年齢や発達に応じた環境が求められる。

かつて倉橋惣三は、アメリカの進歩主義の幼稚園を見学した際に、自由遊び後の活動において子どもたちが見せた集中力に感嘆し、日本の保育にも朝の自由遊びを取り入れた。こうした朝の自由遊びは、今日のが国の保育に引き継がれている。子どもが自分のしたい遊びに十分に取り組むことは、子ども自身の自己発揮と充実感を育てるとともに、そこで新たな事柄に向き合う様々な力を育てる活動でもあることを示唆している。

環境としては、おおむね3歳児までは、子どもの目に見えるかたちで遊び環境を準備する必要がある、4歳以降であれば子どもの要求に応じて必要なものを使えるようにしておくといった配慮が必要といえる。また、3歳未満児の玩具は機能的な遊びができるようなものが多くなり、3歳以上ではイメージに合わせて多様に使える玩具や友だちと協働で遊ぶ玩具や遊具が求められる。つまり、自由な

幼稚園の生活は、自然な流れの中で直接的・具体的な体験を通して子どもの発達が育まれていくことが基本であり、子どもの遊びや活動の姿と関連を持ちながら、自然でゆったりとした生活の流れが大切となる。そのため、たとえば、「あいさつ」や「片づけ」、「食事」や「排泄」など生活習慣に関わる事柄を、単に身につけさせなければならない習慣として厳しく指導するよりも、家庭と園の生活がごく自然につながっていくように日々の対話を通して、子どもが無理なく身につけられるようにしていくことが望まれる。

「園の朝」*

あなたの園の朝のスタートは、どのようになさっていますか？ お母さんと手をつないで、足をはずませながらやって来る子、親の通勤用の車で来る子、お迎えのバスに乗って、にぎやかにやって来る子、など。子どもたちは今日一日の友だちや先生との楽しみを胸に、園に向かいます。**

*倉橋惣三『倉橋惣三選集』（第1巻）p.89「幼稚園の朝」、フレーベル館、1965、参考。

**荒井冽『倉橋惣三・保育へのロマン』p.58、フレーベル館、1997。

特に、幼稚園の朝の始まりは、一日の園生活に大きな影響を与えるものであり、どの子どもにとってもとても大切である。幼稚園における一日のおおまかな生活の流れは〈登園—主体的な遊び(活動)—昼食—主体的な遊び(活動)—降園〉となっている。どの子どもたちにとっても朝はとても大切である。子ども一人ひとりにとって家庭と園の生活がスムーズにつながり、園生活の一日が穏やかに始まることで好きな遊びに夢中になることができるのである。このような見方は、子どもを中心に保育を構想していくことの大切さを指摘しているといえる。

4 保育者の役割

園生活において子どもたちの主体的な活動を促すためには、保育者はどのような関わりをもつことが必要になるだろうか。保育者の役割を考える上で、将来保育者を目指している学生に、幼い頃に通っていた幼稚園や保育所での遊びの場面について先生との思い出をたずねてみた。

Aさん：違うクラスの友だちとも、毎日ままごとや鬼ごっこをして遊んでいたことを覚えています。遊ぶ人数が少なくなると、先生と一緒に鬼ごっこをしてくれて楽しかったです。

Bさん：砂場で先生や友だちと一緒に泥団子づくりをしたことが楽しかったです。ピカピカの泥団子になるようにたくさん泥を混ぜたり、白い砂をかけたりして、楽しくおしゃべりしながら誰が一番ピカピカの泥団子をつくれるか競争しました。

話してみよう！
幼稚園や保育所で大好きだった遊びを思い出して発表してみよう。

Cさん：『わたしのワンピース』という絵本に登場するうさぎのワンピースを先生がかわいく描いてくれました。私はその絵に色を塗ったり、友だちと一緒に絵本を真似してたくさんワンピースの絵を描きました。

Dさん：みんなでサッカーをした時には、ルールがバラバラでうまくいきませんでした。そんな時には、いつも先生と一緒にルールを考えてくれました。色帽子でグループを分けることやゴールキーパーは線から出ないなどのヒントをもらってそれからサッカーが楽しくなりました。

乳幼児期の様々な活動は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う体験となるものであるため、保育者の担う役割は極めて重要といえる。保育者は子ども一人ひとりの発達に必要な体験が得られるように、活動の場面に応じてその役割を果たしていかなければならない。近年、保育者に求められる役割について『幼稚園教育要領解説』第1章第4節の「3 指導計画の作成上の留意事項」(7)教師の役割を参考に、それぞれの学生の思い出と合わせて考えてみよう*。

1. 「子どもの理解者」としての役割
2. 「子どもの共同作業員」としての役割
3. 「子どものモデル」としての役割
4. 「遊びの援助者」としての役割

1 「子どもの理解者」としての役割

保育者には、子どもが行っている活動の理解者としての役割がある。園生活は集団生活の場であり、子どもたちがどんな遊びを楽しんでいるのか、子ども同士の関係性はどうなっているのかなど、一人ひとりの子どもを理解するには、時間の流れや空間の広がりについても視野に入れることが大切である。時間の流れとは、子どもの園生活だけではなく、毎日の登園前や降園後の家庭生活の様子なども含めて子どもの遊びや生活の様子を把握することである。また、空間の広がりとは、クラス内の様子だけでなく、園生活全体を通した子どもの人間関係の広がりも指している。Aさんの思い出からは、毎日の遊びの楽しさがクラスの枠を超えて広がっている様子がうかがえる。保育者は、多様に展開される子どもたちの活動をじっくりと見て、子どもたちがどこで何をして楽しんでいるのかということや、それぞれの子どもの遊んでいる姿からどんな育ちをしているのかなどの確かな子ども理解を重ねていく事が不可欠である。

*文部科学省『幼稚園教育要領解説』pp.116～118、教師の役割(4つの役割)、フレーベル館、2018、参考。

読んでみよう！

『幼稚園教育要領解説』第1章(7)教師の役割を読んで、4つの役割以外に保育者にはどのような役割が求められるか考えてみよう。

1 保育内容の基本構造

1 「保育の内容」とは何か

(1) 「保育の内容」の構成

表4-1は、「保育の内容」の構成を『保育所保育指針』をもとに示している。そもそも、「保育の内容」とは何かというと、子どもが毎日園で行っている自由遊びやクラス活動、行事、食事、午睡などすべての生活といえる。それらは、漠然とした偶発的なものではなく、保育者が子ども一人ひとりの育ちに必要と考えられる経験や内容を計画していくのである。当然ながら、子どもの生活はすべてが保育者の計画通りの内容ではなく、子どもが自発的に始めたこと、取り組んでいることをも含んでいる。つまり、乳幼児期の子どもの発達に必要で子ども自身が取り組む経験や内容を「保育の内容」としているのである。

また、表4-1の年齢区分に示されているように、保育所では0歳から始まり毎年1歳ずつ年齢を積み重ねていく。幼稚園では、同様に3歳から始まりその後毎年1歳ずつ年齢を積み重ねていく。このことは、あまりにも当たり前すぎて意識することなどはない。しかし、この年齢は積み重なっていくことを改めて意識することは、「保育の内容」を捉える上で重要な視点となる。なぜなら、子どもが園で行うすべての生活も、日々の積み重ねだからである。

表4-1 保育の内容の構成

年齢区分	保育のねらい及び内容
5歳児	5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現） ねらい：15 内容：53 内容の取扱い：25
4歳児	
3歳児	
1歳以上 3歳未満児	5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現） ねらい：15 内容：32 内容の取扱い：17
乳児	3つの視点（健やかに伸び伸びと育つ・身近な人と気持ちが通じ合う・身近なものに関わり感性が育つ） ねらい：9 内容：15 内容の取扱い：6
	養護に関わるねらい及び内容 ねらい：8 内容：8

つまり、人の発達が0歳からの積み重ねであるように、「保育の内容」も積み重ねられていくことで発達段階にふさわしい経験となり、望ましい育ちへとつながっていくのである。たとえば、0歳児はティッシュをつまみ出すことを覚え、引っ張ることで次にまた何かが出てくる体験を楽しむことがよくある。この活動からは、予見する期待感、予見したことがその通りに実現する満足感、指先の発達などが促される。自ら絵本をめくり次のページを楽しむ行動などは、このティッシュをつまみ出しがもとになっていると言っても良いのではないだろうか。

発達とは、大まかであったものがだんだんと分化し、機能が増し、技術が身につく、イメージや行動が具体的になっていくプロセスである。保育の内容も同様に、年齢ごとに行動や活動が区分されているのではなく、すべての行動や活動はつながっており、一つひとつの体験が積み重なって次の体験を生み出し、より充実した生活を構成するものとなるのである。

(2) 生き生きとした生活

前項で、「保育の内容」は子どもが園で行うことすべてである、つまり、園生活そのものを指すとした。保育の現場では、生活という言葉はよく耳にする言葉であるが、そもそも生活とは何だろうか。辞書には、『①暮らしていること。暮らしていくこと。②生きて活動すること。③暮らしを支えているもの。生計。』（大辞林 第三版）とあるが、これは一人の人間の生活である。保育現場においては、子どもたちは集団で生活をしているため、行為としては『②生きて活動すること』であるが、その際、時間と空間を多数の友だちと保育者と共に共有していることが特徴的となる。

倉橋惣三は、その著書の中で『私はいつもよく、生活を生活で生活へ、という何だか呪文のようなことを言っています。』（『幼稚園真諦』）と記しているが、それは、保育現場では子どもの「さながらの生活」を大切にしなければならないということである。つまり、子どもの自発的な生活を尊重するということである。言い換えると、子どものあるがままの（その年齢や個性に即した）生活を、他者と関わり合いながら子ども自身の手で工夫し、より豊かな生活へと高めていくことこそ、集団保育現場における子どもの生活といえるのである。

子どもが、自分に合った無理のない生活を主体的に営むということは、自分らしく生活をするということである。自分らしくその場に存在することができるということは、自ずと生き生きとした生活を送ることができよう。家庭とは違う場において、自分の居場所があり、能動的に関わることができる人、物、この環境の中で自己実現を果たしてこそ、生き生きしさに溢れた生活といえるのである。

(3) 集団の中での様々な活動

保育現場では、様々な活動が行われている。食事や排泄、午睡、衣服の着脱な

事例10-3 「ぼくが運転手だぞ！」（3歳男児）

3歳児クラスのすみれ組では、自由遊びの時間になると乗り物ごっこが流行っていた。中でもE君は、バスごっこの運転手になるのが大好きで、夕方の部屋での自由遊びの時間になると、イスを縦に並べて、「バスが発車します。」と友だちにアナウンスをすると、ままごとをしている女の子3人が「乗せてください」と後ろのイスに座った。女の子たちはそれぞれお気に入りの人形を抱えて「これからお出かけなの」と近くにいた担任に教えてくれた。E君が毎日お母さんとバスに乗って登園することを知っている担任は、「運転手さん、安全運転をお願いします」と言うと、E君は元気よく「はい。かしこまりました！」と両手でハンドルを動かす真似をして、バスごっこが始まった。

突然、F君がE君の隣にイスを置いて座ってきた。目をまん丸にして驚くE君に、F君は「お客さん、どこまでですか？」と後ろに座る女の子たちに聞いた。女の子たちは「動物園までお願いします」と言うと、F君は「タクシー発車します」と言った。すると、E君は「違うの！」と言いながらF君を両手で思いっきり押し、F君はイスから落ちて泣いてしまった。担任がF君を抱きかかえようとする、E君は自分が座っていたイスをひっくり返してしまった。

【子どもの姿を読み取る】

- (1) 3歳児期は、遊ぶイメージが異なることでトラブルになることがある。E君の遊びのイメージとF君のイメージの違いに着目してみよう。
- (2) E君がイスをひっくり返して怒ったのはなぜだろうか。
- (3) 3歳児のトラブルを受け止めるには、どのようにすべきだろうか。対応の順番にも着目しながら、この事例で考えてみよう。

【ノート】**事例10-4 「ぜんぶぼくのものなの！」（4歳男児）**

クラスの男の子の中で、レゴブロックで飛行機を作るのが流行っていたが、一つ大きな問題を抱えていた。飛行機の先の部分や翼を作るには、10センチ程の細長いブロックが必要なのだが、10本ほどしかないのでも貴重である。4歳児ともなれば、大人の仲立ちがなくても貸し借りをすることができたり、友だち同士で均等に分けようとする姿が見られる。しかし、G君がいるとそうはいかない。G君は途中からブロック遊びに混ざっても「長いブロックはぜんぶ僕が使うの！」と無理やり友だちから取ってしまう。貸してもらえないと友だちを押ししたり、叩いたり、時にはひっかくことさえあり、担任が間に入っても気持ちが収まらない。集まりの中でおもちゃの使い方の話し合いを持つが、G君にはまったく効果がなかった。やがて、みんなはG君に「貸して」と言われる前に自分から長いブロックを貸すようになり、長いブロックを巡る毎日のトラブルは収まっていった。

ある日、隣のクラスの先生から「みんなG君のこと分かってあげていて、優しさが育っているんだね」と言われ、担任は「本当はみんなも使いたいはずなんですけど……」と悩む担任であった。

【子どもの姿を読み取る】

- (1) G君はなぜおもちゃを独占しようとするのだろうか。その背景に思いを馳せてみよう。
- (2) G君とみんな、G君と担任、みんなと担任の関係性から、このクラスの課題を考えてみよう。
- (3) G君にブロックを貸してあげるみんなの姿をどのように捉えたら良いだろうか。話し合ってみよう。

【ノート】

するなど、彼らによる支えによって獲得される。子どもたちは、スプーンやコップ、歯ブラシ、洗濯ばさみなど、身近な道具をおもちゃにして、その機能や使い方を身につける。同時に、食事のときの一連の順序やルール、マナーなどにも気がつくようになり、その社会にふさわしい道具の使い方や行動様式などを自分のものにしていく。次第に、場面に応じた適切な行動がとれるようになり、遊びを通して物の使い方や社会的な行動規範が定着するのである。

また、生活の中で目にするものから関心が広がり、車や電車などを玩具として取り入れる遊びも多くみられるようになる。



写真12-3 「洗濯ばさみ人形」と「ひも通し」



写真12-4 テープを道路に見たてて電車を走らせる

幼児前期の子どものおとなとの関係は、物を媒介とした関わりが多くなる。初期には、子どもの物の使い方は本来の使い方とはかけ離れていて、いわば「でたらめ」である。だが探索活動を通して物の性質を理解したり、多様な物に触れることで感覚や操作能力を高め、次第にそれらが協応的に働くようになっていく。「でたらめ」に扱われた物の操作は、おとなの助けを借りてはじめて「正しい使い方（本来の使い方）」を知り、その使い方を身につけていく。おとなをモデルとして、また、整えられた環境を通して、おとなが言葉をかけたり、手を添えたりすると、子ども自身も繰り返し試行し、失敗するなどしながら、自分で意識して手を動かし、それを扱う技能を身につけていく。こうして自分でできることが増えることによって達成感や自信を持ち、新たなことに挑戦しようとする意欲や、粘り強くやり通そうとする力を育て、次第に子どもは自由に環境に関わるようになっていく。

さらに、細かい運動的な機能や認知能力、物への認識を深めるなど、型はめやパズル、ひも通し、ボタンつなぎなどの玩具や絵本を使った遊びも多くみられる。こうして身につけた力で、ブロックなども楽しむようになる。

また、水や土の感触といった感覚を楽しむことや、全身を使う運動そのものを楽しむ、前述のごっこ遊びと全身の運動が一緒になった電車ごっこのような遊びも楽しむようになるため、こうした遊びについても工夫したい。

3 遊びと環境をつくる

幼児前期の子どもの発達の特徴をふまえて、どのような遊びや環境構成が考えられるだろうか。子どもの姿から1、2歳児に適した遊びや玩具について見てみよう。子どもの興味や発達に応じて手作りの玩具なども活用されるが、どのようなものが適しているだろうか。

(1) 生活に必要な技能を遊びにした玩具

生活に必要な技能がそのまま遊びとして展開するものとして、ままごと道具を使った遊びや、ボタンつなぎ、ひも通しなどがある。



写真12-5 「ボタンつなぎ」で遊ぶ子ども①



写真12-6 「ボタンつなぎ」で遊ぶ子ども②

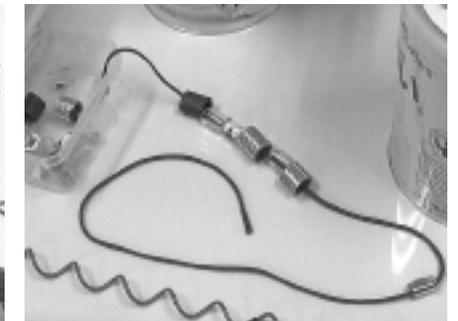


写真12-7 ひも通し

(2) 型はめやパズルなどの指先や認識を育む玩具、遊び

手を使う、目と手を協応させる遊びなどが上手にできるようになると、手の延長である道具を使った遊びも盛んになる。子どもの発達に応じて、好むおもちゃも変わってくるので、手作りで対応するのも良い。ぜひ作ってみてほしい。



写真12-8 ボールを落とす「型落とし」



写真12-9 棒の先の磁石で穴から虫を捕まえる「ひつつき虫」

保育内容総論

～生活・遊び・活動を通して育ちあう保育を創る～

2019年4月1日 第一版第1刷発行

編著者 太田光洋
著 者 朝木 徹・野中千都
相浦雅子・垂見直樹
前田有秀・東 義也
清水桂子
発行者 宇野文博
発行所 株式会社 同文書院
〒112-0002
東京都文京区小石川5-24-3
TEL (03)3812-7777
FAX (03)3812-7792
振替 00100-4-1316
DTP・印刷・製本 株式会社 新後閑

© Mitsuhiro Oota et al., 2019
Printed in Japan ISBN978-4-8103-1477-9

●乱丁・落丁本はお取り替えいたします
●無断転載不可